

-会議名		平成 28 年度公民館運営審議会(第2回)			
事務局		生涯学習課 東地区文化センター			
開催日時		平成28年9月28日(水) 午前 10 時 ~ 正午			
開催場所		教育委員会室			
出席者	委員	13名	欠席2名	その他	1名
	事務局	4名		傍聴者数	0名
公開の可否		可			
内 容		<p>出席者 稲垣委員長、吉泉委員、柳下委員、佐藤委員、鈴木委員、赤木委員、田窪委員、天野委員、橋本委員、松岡委員、飯田委員、佐々木委員、有山委員 安藤社会教育指導員 浅野課長 山頭館長 野口館長 植松館長</p> <p>1 協議題 1) 全国公民館研究集会神奈川大会参加報告 8月25日、26日に神奈川県相模原市を会場に行われた「第38回全国公民館研究集会神奈川大会兼第57回関東甲信越静公民館研究大会 in さがみはら」に参加した委員から、全大会、分科会を相互に報告した。</p> <p>7) 基調講演(佐々木邦彦委員から) テーマ「自治と分権—公民館の本質と新たな役割—」 講師 東京大学大学院教育学研究科教授 牧野 篤氏</p> <ul style="list-style-type: none"> ・主題 大量生産・消費が望めない、希望を探し出せない時代が現代。新しい社会を作る「文化」が必要である。その文化は、「生き方を生み出す。」「新しい社会の価値観を作り出す。」もの。 ・概要 「公民館の設置運営について」(文部次官通牒)から70年を経た時代を、①民主的な自治を基本とした社会と経済を作り上げてきた歴史と、②2000年代の公共から私的(個人的)な社会・経済活動への移行で生じた、自己責任の価値観と住民の孤立化の時代と分けて考える。 そして現代は、個人の人格形成から、家族、地域社会、国家へと結びつけるコミュニティ主権の意識が、楽しい生活、楽しい自治的社会を作る、住民によるコミュニティ経営が求められている。 公民館は、教育行政の「学び」への提言をするところになる必要がある。そのために、地域住民の生活の未来に関わる「新しい専門職」を必要として。具体的には、「学び」と「働くこと」が融合した地域コミ 			

ユニティを創造する場として、住民自身によるコミュニティ経営、行政参画、自治の強化（公共の福祉がすすむ）のための社会基盤の一つの柱として、公民館が求められる。

1) パネルディスカッション

最初に文部科学省生涯学習政策局社会教育課 佐藤秀雄課長補佐から、国の推進施策について、網羅的に解説があった。

その後、実践報告として、沖縄県那覇市若狭公民館長 宮城 潤さん、相模原市立大野南公民館館長 中村洋子さんから、公民館活動の様子が語られた。

コーディネーターは、聖徳大学児童学科准教授 齊藤ゆかさん、アドバイザーには、基調講演の牧野篤さんが残り、5人で進められた。

- ・ 地域コミュニティの変質への対応・首長部局、大学等高等教育機関、民間団体等との連携の必要性、地域の主体的な学習からのリーダー養成、人材育成など課題がある。
- ・ 公民館では、これまで趣味・教養的な学習が中心に行われてきてきたが、結果として参加者層の固定化がすすみ、課題解決に結びついていないことが多い。
「意識の変化」「行動の変化」「相互理解」「アイディアの創出」に結びつくことが求められる。

感想

- ・ 基調講演とも重なるが、特に高齢者生涯学習の観点から、公民館での自己実現の楽しみ、仲間づくりからの地域でのリーダー育成、住民主体の地域課題解決にどのように発展して繋いでいけるかなどの観点が先行すると、学習が長続きしないのではないかと危惧を感じた。

2) 分科会報告

分科会全体のテーマには、大会テーマである「今、なぜ公民館が必要とされているのか？」が掲げられている。

・ 第2分科会「若者をつなげる公民館」

- ① 国立市公民館青年室スタッフ 橋本慈子さんから、「LOVE☆くにスタ」の事例を通して、「『若者』が『社会』につながる時～ハブとしての公民館」の報告があった。青年の支援とはなにか、居場所としての公民館の必要性を提起された。報告は、青年による子どもへの学習支援であった。
- ② 相模原市麻溝公民館からは、青少年部副部長 中島純子さん、青少年指導員 座間豊さん、北里大学海洋生命学部ボランティアサークル代表 五十嵐あやめさんの三名が報告に立ち、地域の健全育成組織を挙げた公民館の青少年事業を、青少年部会に大学生の若い力を積極的に

加えて実施する様子が語られた。

感想

- ・学生がいきいきと公民館のボランティア活動に取り組む姿が伝わってきた。地域に大学があるという利点があるが、大人の理解が必要なこと、参加する子どもたちと若者の関係が印象に残った。
 - ・公民館にも若い職員が必要だと感じた。
- ・第3分科会「家庭教育支援の歩み」

① 山梨市後屋敷公民館館長 天野芳郎さん、②平塚市中央公民館金目公民館 柳川久子館長、社会教育主事 島崎和栄さんの事例報告があった。

山梨市では、児童の放課後教室に対応している。また、地域のふるさと祭りも担当している。後屋敷公民館は図書室をリニューアルして、ちびっこプレールームを幼児のために開催、手作りの紙芝居を上演している。

平塚金目公民館では、通学合宿が特徴ある事業として紹介された。小学4～6年生が、日曜から火曜までの二泊三日で公民館に宿泊、学校に通う。土曜日には事業の概要を保護者に説明してはじめる。日曜には手遊びや手作り工芸などを地域の大人から習う。朝は地域のボランティアが、夜は中学生が協力する。

感想

- ・山梨では、家庭教育で「学力フォローアップ」に力を入れているとのこと。元教師などの活躍がある。公民館が学校の敷地に併設されていることも利点になっていと思う。
- ・通学合宿ができる地域で、子どもが成長していける文化の伝承ができることは大事だと感じた。

- ・第5分科会「公民館事業の企画・評価」

① 船橋市の「船橋市生涯学習コーディネーターの活動」生涯学習コーディネーター連絡協議会会長 高山達郎さん
② 厚木市の「愛甲公民館公民館発・地域再発見！」館長石井克彦さん

感想

船橋では、生涯学習コーディネーターが、社会教育事業の企画に関わり活躍している様子が語られたが、質疑では、事業の評価の視点として、指定管理への質問があり、意見が多くでた。委託での競争のため、安価な選択がされることや、事業、管理上の責任の所在などについて、不安が述べられた。

事業の評価に関して、「発表することも評価をもとめること」との考え方もあると語られた。

・第9分科会「シニアが輝く公民館」

① 三条市(新潟)「きっかけの一步事業」三条市中央公民館係長 阿部修造さん

② 座間市「主体的継続的学習こそが企業人を地域の担い手に！」東地区文化センター社会教育指導員 安藤咲枝さん

感想

三条市の事例は、誰もが参加したくなるような内容で、互いに親しむことができていると感じた。座間市のあすなろ大学とともに考えると、やはり自分たちの学習や活動としてすすめるとき、リーダーの役割は大切になってくるといえる。地域のきづなはどうつくるか？

地域の中にどのように根付いていくか考えさせられた。どちらの事例も学びを中心にして、“きづな”を深めることに重点を置いている。

3) 東地区「あすなろ大学」について(意見具申に係る準備学習)

「あすなろ大学」の現状について東地区文化センターの安藤咲枝社会教育指導員より説明を受ける。

- ・はじめにあすなろ大学の現在の事業概要と、企画、運営を共に行う受講生の会「あすなろ会」について説明を行う。

[あすなろ大学とあすなろ会の概要]

- ・現在受講生 200 余名、毎年 5 月から 3 月までの毎週金曜日、午後を中心に、東地区文化センターで学習活動を行う高齢者学級として定着している。受講生の増加と学習内容の広がりを、どのように受け止めていけるか。

[学習の機会として、あすなろ大学をどう位置付けるか]

- ・学級のプログラムは調べ学習、郷土学習、時事講座の三つの柱で進めてきたが、学級を共同して運営する受講生の自治組織「あすなろ会」誕生後は、調べ学習を元に会活動の中でクラブ活動が活発に行われるなど、継続した学習活動や文化活動を行っている。

- ・学習の成果は、公開自主講座(受講生が調べ学習の成果を講座として公開する)、調べ学習の記録を残すレポート集の公開「あすなろ文庫」、全ての活動のまとめ誌の発行、講座記録誌の発行など、また地域の子育てサークルとの交流事業や文化祭等への参加・協力などの形で地域に還元されている。

[事業として継続するための課題]

- ・学習することの魅力があすなろ大学にはあるが、調べ学習として柱に据えている「大航海」(自分の関心のあることを、自由に自分自身で調べ、その本質に近づく自己学習)が、学習の継続性を生み出している。学習を継続することはライフワークを持つ要になっている。

[受講生の主体的な学級運営への参加がすすむ]

・大学を運営するために、受講生の主体的な参画の組織として、あすなろ会ができ、あすなろ大学が受講生(市民)のものになってきた。社会教育行政は、市民に使われるべきものと言われているが、その担い手と公民館の関係は、まだ整理されているとは言えない。

・センターでのあすなろ大学の歴史は、発展・拡大し続ける学級の伝統を、どのように継承するか、継続していくかを考える営み。今は、再度事業の方向を確認する時期にきている。

市の生涯学習プランに照らした社会教育推進の基本方針にそって考えてみると、すでにあすなろ会を作るときに、その精神として皆で議論して作った「あすなろ憲章」というものもあるが、受講生のライフワークに沿った生涯学習の場をつくるには、公民館職員と受講生が役割分担をして、学習機会をどう作るかを考えることが鍵になってくる。

あすなろ大学での高齢者の学びに沿って、学習の結果として受講生が地域に結びつく、また、他世代のことを意識した現代的な課題を取り上げて、自分のこととして暮らしの中に活かしていくことができるよう、事業が組立てられて、職員、受講生が協働するようになることが望まれる。併せて職員の側は、その要求に応えられる専門性を高める努力が必要だと感じている。

(要約)

あすなろ会会長でもある佐々木委員からの補足の意見が述べられた。

：あすなろ大学が大きくなりすぎた。ということは感じている。大学をどういう形にすることが良いのか考える中で、社会教育行政での「公民館の役割」についても見えてくるのではないかと。委員のみなさんで考えて欲しい。

3) その他

研修会「公民館長・公民館運営審議会委員等研修会」

日時 平成 29 年 1 月 27 日 (金) 午後 1 時～4 時 15 分 (予定)

会場 横須賀市本町公民館

内容 人権講話 (未定)

講演 「地域学校連携、公民館の果たす役割」(仮)

講師 東京大学大学院教育学研究科教授 牧野 篤氏